

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02174

研究課題名(和文) 音の風景 を手がかりとした 記憶の政治 の解明に関する環境社会学的研究

研究課題名(英文) An Environmental Sociological Study on Exploring 'the Politics of Memories' through the Concept of 'the Soundscape'

研究代表者

大門 信也 (DAIMON, Shinya)

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：00559742

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、遠州灘沿岸地域に伝わる海鳴り・波小僧伝承を手がかりにして、当該地域における海と人びとの関係の変化と今後の可能性を探った。調査や実践の結果、伝承が現実の物理現象にもとづいており、人びとの暮らしに即した生活知であったことが明らかになった。地域環境生活誌の変化のなかでその生活知は現在失われつつあるが、通常の世界調査に加え市民調査やワークショップの実施をつうじて、環境と地域の人びとの関係をつなぎなおしていくための手がかりにもなることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、環境と人びとの関係の変化を、海鳴り・波小僧伝承という聴覚的な環境文化の観点から明らかにした点にある。とくに学術的には環境社会学の論脈において、地域の生活誌と波音の観察と関連づけながら、「気象」や「観天望気」という新たな論点を加えつつ、人びとの生活知の変化を明らかにすることができた。また研究者による調査にくわえ、市民協働調査、ウェブサイトによる市民参加型の情報収集、地元小学校での授業、一般対象のワークショップを実施することで、失われつつある聴覚的な環境文化を継承していくための実践を試みた。これは学術的成果であると同時に、それ自体社会的意義をもつ取り組みとなった。

研究成果の概要(英文)：This research explored the changes in the relationship between the sea and the people in the coastal region of Enshu-nada, using the traditions of "Umi-nari (Sea rumbling)" and "Nami-kozo (Wave boy)" as key focal points. Through surveys and practical activities, it was revealed that these traditions are based on real physical phenomena and represent a form of life knowledge rooted in the daily lives of the local people. Although this life knowledge is currently fading during changes in the local environmental and lifestyle records, it has been found to be a potential clue for reconnecting the environment with the local community.

研究分野：環境社会学

キーワード：サウンドスケープ 海鳴り 生活知 生活誌 気象 観天望気 市民調査 音響生態学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人びとと環境の関係を分析してきた環境社会学では、その関係性を織り込んだ地域の社会的記憶の議論が展開されている。とりわけ今日の災害多発状況をふまえ、地域の強靱化を名目とした土木開発が、高度経済成長期におこなわれた開発後の風景をさらに改変し、人びとの地域の風景に関する身体的記憶を何層にも上書きしていくことの問題が指摘されていた(福永, 2018)。他方、文化社会学における風景論(佐藤, 1994)では、生活にねざした風景をいかに継承していくかという実践的課題をみすえて、サウンドスケープ(音風景)論などを取り入れた、あらたな方法の検討が必要とされていた。

本研究がフィールドとする遠州灘沿岸では海鳴り・波小僧伝承が伝えられており、1996年には環境庁による「残したい日本の“音風景 100 選”」に選定されている。この伝承は、波音(海鳴り)が遠くまで一定の方向から聴こえる「不思議さ」を基礎としつつ、その音の聴こえる方向で天候の変化を知ることができるとされており、自然環境(海)と人びととの関係のあり様を伝えている。他方でこの地域では、3.11以降の危機感や安全へのニーズの高まりのもと、地域住民を津波被災から集団的に防衛する防潮堤の建設が進められていた。海と人びととが隔てられ、これまでと異なる新しい風景が出現しつつあった。

「海鳴り」という遠州灘に特徴的な音風景がいかなる現象なのかを地域の人びとの証言や実際の観察(聴取と録音)から明らかにし、伝承にこめられた意味や現在の地域社会におけるその変容を探る作業は、環境社会学や文化社会学的風景論への重要な貢献になると考えられた。また人びとと環境との関係や、その関係にまつわる社会的記憶を現地調査によって掘り起こし、今後の新たな関係づくりへと活かしていくための手法を検討することは、学問の実践的価値の探究につながると同時に、それ自体が社会的貢献をなすと考えられた。

2. 研究の目的

人びとと自然環境との関係を地域固有の音風景からとらえなおし、あらたな社会的記憶にしていく「再記憶化」の実践手法を検討することが、本研究の目的である。具体的には、台風災害や津波等のリスクをかかえる遠州灘沿岸地域(うち浜松市域)を調査地とし、同地域に伝わる海鳴り・波小僧伝承を手がかりに、聞き取り調査や波音の観察調査を実施し、人びとと海との関係の変化を明らかにしようとした。さらに地域住民との協働による実践的な研究活動をつうじて、人びとと海とのあらたな関係を構築していくための手法を検討した。

3. 研究の方法

遠州灘海岸に近い地域や、20 km以上離れた中山間地域それぞれで、地域活動を行う住民団体を協働的なパートナーとしつつ、住民への聞き取り調査や証言の収集を実施した。またウェブサイトをつうじた証言の収集も試みた。同時に公立図書館や資料室での収集を軸とした文献・資料収集も行った。さらに、海鳴り現象の観察記録を精緻化するために聴取観察と同時に環境音の録音を実施した。

調査協力を得た地域活動団体のうち、とくに海岸付近の地域団体「浜風会」と観察(録音・聴取)調査を実施した。当該団体は自律的な活動として2021年から2023年にかけて定点的な波音の観察・聴取を実施し、研究者側からはその活動に必要な設備の提供や、集めた後の記録の整理や分析結果の提供などを行った。それぞれの自律性を前提とした協働体制のなかで、独自の観察記録を蓄積した。またウェブサイトでの証言収集は、「みんなでつくろう波音マップ」というサブプロジェクトをつうじて、海鳴り・波小僧をめぐる地域内のコミュニケーションの活性化も企図して行われた。くわえて2023年には、浜松市立篠原小学校3年生の総合科目における出張講義や、地域の小学生親子を対象としたワークショップ「音さんぽ」を実施した。

4. 研究成果

(1) 海鳴り現象の分析

海鳴りの物理特性に関する知見

海鳴りの音響特性について検討した結果、次の点が明らかになった。海岸での波の破碎により生じる「波音」のなかで、とくに海鳴りと呼ばれる現象は、中低音域で発生する持続音であり、通常イメージされるような個々の破碎の音とは異なり、海岸から距離をおいて聞こえる音であることがわかった。具体的に図1は、海岸付近での録音と1.5km離れた地点での録音を比較したものの、図2は、1.5km地点で台風の接近時と離脱時を比較したものである。横軸は時間、縦軸は周波数を指しており、上下はステレオマイクの左右を意味する。図1では1.5km離れた右側の録音、図3では台風接近時の左側の録音で、中低音域の持続音を確認できる。

また、以上の特性理解にくわえ、さらに次のような知見も得られた。まず、海岸付近での観察や証言から海鳴りの季節変化に関する情報が得られた。海鳴りははやければ3月の春一番にはじまり、梅雨の時期に恒常的に聞こえるようになり、台風の時期に最も大きく聞えるようになるが、その時期を過ぎると海鳴りはほぼ聞こえなくなる。次に上記の海鳴りの音響特性は、航空機や幹線道路交通音の音と共通するところがあり、しばしば両者の区別を難しくさせてい

た。それは調査の技術的困難をもたらしただけでなく、地域住民が海鳴りを聞きなす明瞭（ハイファイ）な音環境が失われてきている現状を示してもいた。また、海鳴りの同定の仕方として、移動をしながら観察を繰り返し「一定の方向からきこえる中低音の持続音」を把握する方法が有効であった。それは海岸から内陸へ遠ざかりながら複数の地点で観察する方法と、海岸から同一距離の複数の定点を平行に移動して観察する方法の双方で確認できた。

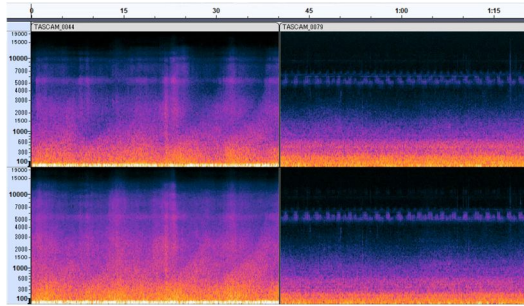


図1 海岸地点と1.5km地点の比較

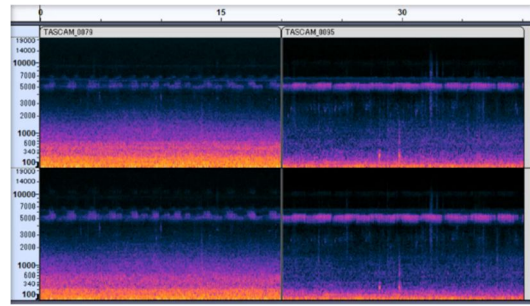


図2 1.5km地点の台風接近時と離脱時の比較

海鳴りの長距離伝搬やその他の特徴

こうした音響特性にに加え、海鳴りの長距離伝搬について検討した。図3は、調査期間中に得られた観察記録と証言を地図上にプロットしたものである。紫の丸は、協働した住民による観察、赤丸は研究者による観察がなされた場所である。赤い四角は、研究者が現地住民から得た証言、青い四角はウェブサイトでえられた過去に聴こえたという証言、緑の四角は2022年に実際に聞えたという証言が得られた場所である。以下、得られた結果を述べる。

まず伝承が伝わる25km付近の山間部の地域をみると、海鳴りが聞こえるという証言が得られている。また調査者による観察においても、20km以上離れた地点で海鳴りが確認できた。以上から、海鳴りの長距離伝搬は伝説のとおり実際に生じていることがわかった。

こうした海鳴りの発生のメカニズムについては、和達和夫による線音源説（和達, 1971）が有力であると考えられるものの、長距離伝搬のメカニズムやその経路等の挙動について、十分に明らかにはならなかった。他方で、音の伝搬に関する手がかり的な情報は複数得られた。以下、概略を示す。

前述のとおり、海鳴りは波の高まる夏場により大きくなり、波が収まる冬場は静かになる。中山間部でも、台風の時期に聞こえるという証言が得られていることから、長距離伝搬には季節による波の高さの変化が影響していると考えられる。ただし、冬場に波音が聞こえていたという証言も得られており、気温による伝搬の変化等、海岸付近の聞こえ方とは異なった季節変化があった可能性がある。

さらにより詳細な波の高まりと海鳴り現象との関係について、気象庁の波浪図を参考に検討したところ、海鳴りの発生には、海岸付近の波の高さだけでなく、波浪が発生する海域の広さも影響していることが考えられた。

また、地形による伝搬の変化について、中山間部において波音がきこえたという証言は、谷あいの集落よりも山あいの視界の開けた集落で多く得られている。谷あいでの証言が少ない理由として、音の伝搬による影響、視覚による効果、あるいは自動車騒音等の影響が強い等が考えられた。他方で山あいであれば、海との間により標高の高い山がある場合でも、他の騒音の影響を受けにくく、かつ回折によって波音が到達しやすと考えられた。

なお波小僧伝承は、波小僧が太鼓の音で天候を知らせるという記載もある。この伝承を裏づける有効な観察を本研究期間内に得ることはできなかった。ただし本研究期間外ではあるが、太鼓のような音が台風時に生じることが観察されている。また本研究期間中、波が同時に長折れし砕波する際、「ドン」という重低音が響く様子が録音された。

(2) 海鳴り現象の意味

海鳴り・波小僧伝承は、遠州七不思議のひとつと数えられ、地域の伝承集や絵本等による紹介が数多くある。これらは、実際に古老などから得られた

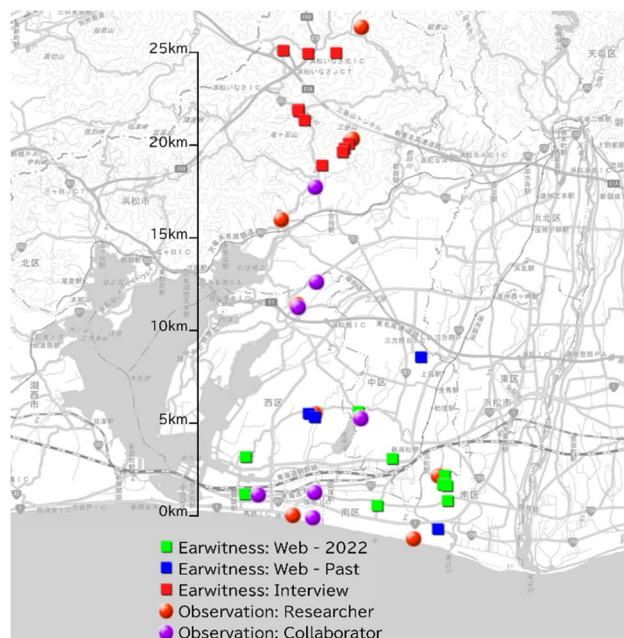


図3 観察および証言が得られた場所

口承を収めたと考えられる文献のみならず、すでに文献で知られる内容を写したのものもある。その内容を精査したところ、表1に示すような4つの類型が得られた。

表1 海鳴り伝承の4類型

類型	場所	音の機能・特徴	関わる人間
A 無人格型	非特定	遠方に届く特殊音響、観天望気	非特定
B 人形型	内陸	観天望気	農民
C 化物型	海上	観天望気	漁民
D 小僧型	沿岸	観天望気	農民、漁民、半農半漁

表1に示す4つの類型のうち、沿岸付近の農業は半農半漁を生業とする地域に「小僧型」の物語が多くある。さらに他の類型では、観天望気の筋立てを欠落させる物語タイプが含まれるのに対して、「小僧型」はそうした欠落が見られなかった。海鳴りの機能を伝える伝承としては、「小僧型」にその典型が示されていると考えられた。

聞き取り調査によれば、中山間部を含む広い沿岸地域において、農業や農閑期の副業等、天候に左右される生業を営む人々のあいだで、天気の変化は海側（南側）から訪れるという生活知を有している様子うかがえた。とくに天気が崩れていく際、南東側からの変化が重要であり、それは雲の様子や、風向き、湿度等の変化によっても知覚されるようであった。海岸から20km以上離れた地域での住民の証言によれば、かつては波の音によっても天気の変化が捉えられていた。また海岸付近では、潮風が農作物に被害をもたらすことから、とくに台風接近に関する情報が重要視されていた。これらの状況から推測すると、海鳴り・波小僧伝承は、この地域に住む人びとの生活知が物語化されたものであり、(1)の知見をふまえれば、それは現実の音響現象に関連づけられていた。

他方で、それらを地域住民が「波小僧」として認識しているという証言は得られなかった。山間部では、あくまでも波音がいつもと異なって聞こえたときに、天気の変化を察知するという使い方に関しての証言であった。また沿岸部でも、波音は聞えるが、「波小僧」という認識できくことはしていないという証言が得られた。

なお、波音を実際に自分できいたことがないという証言や、近しい上の世代からそうした話をきいたことがないという証言も複数得られており、その証言数や世代分布などから、一般的には、地域住民は波音を日常生活において認識していないことがうかがえた。

(3) 地域の生活誌にもとづく分析

また本研究では、地域の生活誌をひもとくことで、伝承や実際の波音の意味の変化を探った。対象地域は、沿岸付近の篠原地区である。

篠原地区は、半農半漁の生活様式を典型としていたが、近代化以降（とくに戦後）漁業からの撤退、農業から繊維業への変化、さらにサラリーマン世帯の増加と生業の変化といった職業構造の変化が進んだ。これに重ねて、幹線道路の整備と防潮設備（堤・堤防）といった物理的变化、また前浜（ハマ）とよばれる沿岸での遊泳禁止による遊び場としての変化等、多様な契機が折り重り、人と海（およびハマ）の関係が多層的に変化してきた。総じてこの地域では、両者が切り離されていく過程を20世紀中盤以降にたどっており、1940年代生まれの周辺世代がかかるうじて、ハマでの遊びの記憶をもっている状況である。

以上のことから、当初本研究で想定していた防潮堤のような物理的隔絶や風景の改変がもたらすもののみならず、生業の転換のなかでの暮らしの変化、海鳴りの聴取におよぼす他の騒音源の増加などといった、より総合的な状況のなかで、風景の認識や記憶のあり様に変化し、海鳴り・波小僧伝承のリアリティを失わせている様子が明らかになった。本研究課題では期間中に十分な分析に至っていないが、中山間部の引佐地区における調査でも、篠原地区と同様、暮らしの総合的な変化が、風景の認識や記憶のあり様に影響を与えている様子うかがえた。

(4) 関係をつなぎなおす実践と今後の可能性

本研究ではさらに、意味を喪失しつつある海鳴り・波小僧のある風景を、あらたに地域の社会的記憶にしていく「再記憶化」の試みとして、市民調査の実施、ウェブサイトによる情報収集、地元小学校での授業実施、一般対象のワークショップの実施、の4点の事業を展開した。

市民調査は、郷土誌研究グループ「浜風会」と協働で実践した。浜風会は、海鳴り・波小僧の探究を自らの活動テーマとして位置づけ、意欲的に観察や録音にとりくんだ。2021年度は、7月から10月にかけて、同会有志3名によるほぼ毎日の観察と録音を実施、海鳴りの毎日の変化が克明に記録された。2022年度と2023年度には、台風の発生ごとに10名前後の有志メンバーが、自宅を中心とした定点観察を実施、4つの台風についてその発生から消滅までの期間に波音の大きさや性状を記録した。その結果は、図3にも反映されている。

ウェブサイト（<https://namikozo.com/>）による情報収集は、地域との協働をより広く展開

していくしかけとして 2022 年 7 月より開始した。サイトでは、海鳴りに関する話題提供のほか、「みんなでつくろう波音マップ」と題して市民からの情報提供を呼びかけた。サイトにある入口から投稿フォームを開き、波音の聞こえた場所、時期、どのような音だったかなどを記入すると、その情報が地図上に反映されるしくみとなっている。サイト開設以降 2023 年 3 月までに 15 件の「耳の証言」が寄せられた。

地元小学校での授業は、2023 年 5 月、浜松市立篠原小学校 3 年生「総合」科目にて学年合同で行った。「なみの音ってどんな音？～しのはらの環境と文化を体で感じる～」と題し、具体的には地元の音を織り交ぜた音・耳クイズ、波音を主なターゲットとした教室と屋上でのイヤークリーニング、海鳴り・波小僧伝承の解説を行った。海鳴り・波小僧の「知識」を伝えるだけではなく、何よりも耳をひらくこと、身近な環境に気づくことの面白さを体験し、子どもたち自身の探究心を高めることを重視した。

ワークショップは、親子連れ的一般参加を呼びかけて 2023 年 10 月に行った。音風景研究者岩田茉莉江氏を招いて「音を感じながら散歩をして、五感をひらく」ためのサウンドエデュケーションプログラム「音さんぽ」ワークショップを実施した。浜松市内の小学生と保護者で、6 組計 13 名が参加し、ブラインドウォークや音をつかったかくれんぼ、地元住民による浜での遊びの実践、砂浜でのスケッチ、即興演奏など、耳をつうじて浜辺の環境に親しんだ。

以上 4 つの事業から、伝承を手がかりとしつつ自らの身体感覚（聴覚）を働かせていく活動が、地域住民の身近な環境に対する主体的な探究姿勢を高め、地域固有の環境文化を継承していくために役立つことがうかがえた。

(5) 総合的考察と結論

以上の調査研究活動から得られた成果は、次のようにまとめられる。

遠州海鳴り・波小僧伝承に言及された音響現象の特徴を把握することができた。とくに海岸から 25km 以上離れた山間部までの波音の長距離伝搬が現実には生じることが、住民の証言や観察から確認できた。海鳴り現象は、伝承が示唆するように地域の人びとの生業を背景とした観天望気的な機能を有していたことが明らかになった。

他方で、それを波小僧として聞きなす文化が失われており、観天望気として海鳴りを聞きなす文化もまた衰退していた。そのような文化的意味の喪失の背景には、防潮堤建設等の単発の要因だけでなく、近代化・産業化の過程全般の諸要因が絡み合って生じていることがわかった。

こうした聴覚的環境文化を未来につないでいくためには、住民による気づきを促すような多様なしかけ・しくみづくりが必要である。子どもや親子を対象とした授業やワークショップ、ウェブサイトのようなくみを利用したサウンドマップづくり、また住民自身による調査実践は、そのための有力な手法であることが確認された。

今後、海鳴りの伝搬メカニズムや、その基盤となる地域社会の生活誌の解明、聴覚的環境文化を未来につないでいく実践的手法について、さらなる調査研究が必要である。

【参考文献】

- 大門信也，2022，「遠州灘の海鳴り / 波小僧伝承と前浜の記憶 風景を語り継ぐ道 のための一試論」『関西大学社会学部紀要』53 (2) : 23-48 .
- 大門信也・箕浦一哉・兼古勝史，2022，「遠州灘沿岸における「海鳴り」の音響体的特徴の考察 2022 年の現地観察記録および録音データにもとづいて」『日本サウンドスケープ協会 2022 年度秋季研究発表会 論文集』: 33-42 .
- DAIMON Shinya, MINOURA Kazuya, KANEKO Katsushi, 2023, A Soundscape of Sea Waves and Collaborative Action Research: The Case of the Nami-kozo Folktale at Enshu-nada Sea, Japan, The 2023 World Forum for Acoustic Ecology Conference, Florida, USA.
- 福永真弓，2018，「須賀の絵解き地図を描く 風景の「上書き」を超えて」羽生敦子・佐々木剛・福永真弓編著『やま・かわ・うみの知をつなぐ 東北における在来知と環境教育の現在』東海大学出版部：51-65 .
- 兼古勝史，2023，「遠州灘の海鳴り伝承の実態報告 波小僧伝承調査から」『音楽教育メディア研究第 9 巻』: 11-17 .
- 兼古勝史・大門信也・箕浦一哉・岩田茉莉江，2024，「郷土の音環境文化の伝承と創造 遠州波小僧プロジェクトのサウンドエデュケーション」『音楽教育メディア研究第 10 巻』52-53 .
- 箕浦一哉・大門信也・兼古勝史，2021，「市民との協働によるサウンドスケープ調査 浜松市における波音調査の経験から」日本サウンドスケープ協会編『日本サウンドスケープ協会 2021 年度秋季研究発表会 論文集』: 7-12 .
- 佐藤健二，1994，『風景の生産・風景の解放』講談社 .
- 和達清夫，1971，『青い太陽』東京美術 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 兼古勝史	4. 巻 9
2. 論文標題 遠州灘の海鳴り伝承の実態報告 波小僧伝承調査から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 音楽教育メディア研究	6. 最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大門信也	4. 巻 53(2)
2. 論文標題 遠州灘の海鳴り / 波小僧伝承と前浜の記憶 風景を語り継ぐ道のための一試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 23-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 兼古勝史・大門信也・箕浦一哉・岩田茉莉江
2. 発表標題 郷土の音環境文化の伝承と創造 遠州波小僧プロジェクトのサウンドエデュケーション
3. 学会等名 日本音楽教育メディア学会 第18回研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 MINOURA Kazuya, DAIMON Shinya, KANEKO Katsushi
2. 発表標題 Soundscape conservation policy focusing on the active listening: An examination based on the case of the Enshu-nada Sea of Japan
3. 学会等名 inter-noise 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 DAIMON Shinya, MINOURA Kazuya, KANEKO Katsushi
2. 発表標題 A Soundscape of Sea Waves and Collaborative Action Research: The Case of the Nami-kozo Folktale at Enshu-nada Sea, Japan
3. 学会等名 The 2023 World Forum for Acoustic Ecology Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大門信也・箕浦一哉・兼古勝史
2. 発表標題 遠州灘沿岸における「海鳴り」の音響体的特徴の考察：2022年の現地観察記録および録音データにもとづいて
3. 学会等名 日本サウンドスケープ協会 2022年度秋期研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 兼古勝史
2. 発表標題 遠州灘の波小僧伝承調査から：風景のアーカイブズとしての校歌
3. 学会等名 日本音楽教育メディア学会 第16回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 箕浦一哉・大門信也・兼古勝史
2. 発表標題 市民との協働によるサウンドスケープ調査 浜松市における波音調査の経験から
3. 学会等名 日本サウンドスケープ協会 2021年度秋期研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大門信也
2. 発表標題 浜辺の音環境を考える：遠州灘における語りと歴史を手がかりに
3. 学会等名 日本音響学会 騒音・振動研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> ・ポータルサイト「遠州波小僧プロジェクト」(https://namikozo.com/) ・兼古勝史, 2023, 「新・地域メディア最前線Vol.114: みんなでつくろう波音マップ~遠州波小僧プロジェクト」『B-maga』サテマガBi, 22(2): 28-29. ・大門信也・箕浦一哉・兼古勝史, 2023, 「「遠州波小僧プロジェクト」について」『サウンドスケープ』23: 27-30.

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	箕浦 一哉 (MINOURA Kazuya) (10331563)	山梨県立大学・国際政策学部・教授 (23503)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	兼古 勝史 (KANEKO Katsushi)	放送大学・千葉学習センター・客員准教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------